昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一日一回發行）

主筆　江原萬里

聖書の眞理

第五十五號

五月號

我が國の二大思潮　江原萬里
機械神と人格神
奢侈なる教育
神を求むる心（上）
ヱレミヤ記の研究　江原萬里
神殿攻撃演説
受難週間の研究　小栗襄三
葬の日のために
基督教と結核病　平山去私
柏木通信　齋藤宗次郎
人道主義とマルクス主義
身邊漫筆　パンと自殺

昭和七年（1932）五月一日發行

我が國の二大思潮

我が國に二大思想の對立がある。その第一は國家主義である。第二は民衆主義である。此の二者の消長が明治以來の我が國の歴史に顯著なる色彩を與へて居る。

明治維新以來、我が國は西洋諸國の東洋侵略に對抗して之を排除する必要があつた。加之、封建制度が瓦解した直後、物情不安定にして、西南戰爭等内亂が度々起り、國内の事情よりするも全体を國家至上主義を以て統一する必要があつた。爰に於て我が國政府は現代プロシアの興隆、そのオーストリア及びフランスの勢力排除、獨逸全體の統一、中歐に一大帝國の建設の事績に鑑み、主として獨逸に摸して東洋に比類なき强大なる中央集權國を建設した。國家主義は官僚及び軍隊に由つて徹底的に支持された。

然るに我が國民は早くから英米民族の思想に感化せられること深く、英語は我が國の第二の國語と見られ、各中學校の必須科目とせられ、此の英語を通じて、啻に英米の產業交通商業を學ぶのみならず、文學宗教政治を學んだ。而して此の英語國民の思想の中堅を成すものはピユリタンの信仰であつて、カルビンより來た民衆主義である。即ち、國家至上主義に對する個人の自由獨立主義、官僚主義に對する議會主義がそれである。

斯く政府はルーテルの故國ドイツを師として國家至上主義を支持し、人民は英語國民に學んでカルビンの流を汲む個人の自由獨立主義に近づいた。此の二者が我が國明治以來の二大思想潮をなし、今に至るも種々なる形に於て顯はれてゐるのである。

その政治に顯はれたものが、往年の官僚主義對議會主義の爭であり、最近に於ける政友會民政黨の爭である。一方は對外硬を主張し、力を以て東洋を統一せんとし、又内は政府の保護に由つて產業を發達せしめやうとする。他方は對外協調を目的とし、各國の同意に由る東洋聯盟を策し、内はなるべく產業及び社會の發達を個人の自由なる活動に俟たんとする。

然し乍ら此の二大思想の對立は啻に我が國に特有な事實ではない。我が國は只全世界の狀態を反映して居るに過ぎないのである。英米主義對獨逸主義の對立は世界近世史の顯著なる事實である。世界大戰に英米主義は獨逸主義を破つて一時世界を支配したが、やがて大なる反動が來た。神に據つて立たない自由主義は無力である。今や世界到る處自由主義は不評、國家統制主義を歡迎しつゝある。我が國にても民政黨大敗し、政友會が大勝した。

此の二大思潮の行く先如何、國家統制主義の極致はイタリアに、民主主義はロシアに向ふ。然かも信仰なく、靈魂の自由を確保しやうとしない自由主義の落つくところは、國家統制主義と同じく、獨裁政治である。眞の自由が之にあろう筈がない。

基督者は靈魂の自由を確保しやうとする者である。其の國は此の世の國でない。故に此の世のどの黨派にも屬しない。來るべきキリストの御國を待ち望み、「地にては旅人、寄寓者」としてアブラハムの如くに生きるのである。キリストに在りて生き、目前に置かれたる日々の義務を忠實に果し、靈魂の自由を死守する。徒らに大言壯語しない。目前の小なる義務を懈たらず、小善をなすを悅ぶ。神命じ給へば國の最强力者の前にも否と云ふ。此の忠實が世を改造する。

聖書之眞理
昭和七年五月一日發行
第五十五號

機械神と人格神

主筆

産業とは天然の資源を採取し、之に加工し、人生の用に充てる事である。然るに現代に於て蒸汽機關其の他の巨大なる機械が産業に應用せられて以來、資源の採取加工の方法は長足の進歩をなし、今日の物質文明は現出し、所謂資本主義的社會となつた。資本主義とは機械主義の事である。機械の所有者は之を有しない者より遙かに多額の所得を得て貧富の懸隔甚しくなり、無産者の勞動を支配するに至つた。

物なる機械が人の勞動を支配するに至つて、人は一個の微弱なる機械となり、それ以上の價値を失つた。かくて現代人の宇宙觀に大なる變化が生じ、宇宙はそれ自身獨立存在の一個の巨大なる機械と見られ、一切の存在は此の機械を構成し、又活動せしめる物質となつた。人間も亦その靈魂は無視せられ、只の製糞機となつて仕舞つた。此の思想を端的に言ひ現はすものがマルクス主義である。マルクス主義の拜する神は機械である。彼等の排斥する神は正義、憐憫、永生の神である。

然し乍ら人の中には機械にない生命がある。他の生物にない靈があり、全能者の氣息之に聰明を與へ給ふ。機械になく、天然の資源も産出し得ない無限の生産能力が其の中に潜む。若し人が其の神を知り、神に由つて其の人たる自覺に達した時それが現はれ出るのである。然るに人が自ら造つた機械に支配せられ、其の奴隷となつて、彼は大なる墮落をなした。エデンを失つたのである。か

くて人は資本と資本と、又資本と勞動と爭ひ、天然の資源爭奪に世界を修羅の巷とし、地を荊棘(いばら)と薊(あざみ)の荒地となしつゝある。

世は行詰まつた。それは機械を神として拜する唯物的宇宙觀の行詰である。今後の產業の指導者の眼は更に高所に注がれなければならない。一段高き人生觀を要する。即ち機械神の代りに、人格的なる神を知らねばならない。其の時、產業の目的は營利でなくなる。人格の發達がその目的となる。人の勞動は商品でなくなる。全人格の表現となる。其の中に潛在する無限の潛勢力の發揮あつて、世界の擾亂は息み、爭鬪は過ぎ去り、不況は繁榮となる。各自の一家に於ても亦仝樣である。

我が國人に此の眞宗敎のない事程、國の前途を暗憺ならしめ、東洋の平和を危くするものはない。

奢侈なる敎育

現今我が國の高等敎育の大半は裝飾のための敎育である。之は社會階級の上層に入るためには必要であるが、人間としての眞の生活には無用なる敎育である。此のために窮乏せる國庫の支出は增し、父兄は學資調達に惱み、子弟は無益に精神と躰力とを費消する。

此の事は重要なる社會問題である。何となれば此の無用なる敎育が貧富の懸隔を增大するからである。此の敎育は上級階級に入るために必要である。故に貧者は人として立派でも其の資格を缺く。普通以上の收入ある者は自己の社會的地位を維持しやうとして、その子弟の敎育費に惱み、己が收入に感謝せず、絕ゑず不足を感じ、自分以下の者が學費に苦しむも之に同情する餘裕がない。

裝飾的敎育をやめよ、人が人として必要なる敎育のみを授けよ。ここに眞の人間らしい生活があり、自由にして平等博愛の社會が現はれる。

神を求むる心（上）

江原萬里

我等の心

汝は我等を汝に向けて造り給へり。されど我等の心は汝のうちに憩ふまで憩ふことあらず　Quia fecisti nos ad te, et inquietum est cor nostrum donec requiescat in te. (Conf. I i.) とはアウグスチンの有名な言である。我等には抑へても抑へ切れない深い欲求がある。それは神がかくの如き者として我等の靈魂を造り給ふたからである。人間は朝に生れ夕に死す、其の生命、其の意、其の情、其の知、悉く有限である。然かも此の有限の身を以て無限を慕ひ、無限の生命、無限の智慧、無限の愛、無限の意志中に自己を見出し、御胸に倚り、御腕に憩ふて「汝の御意（みこころ）の中にのみ我が平安はあり」（ダンテ神曲天國篇三）と云ふまでは我等に平安はないのである。

實に我等が神を求め、神を慕ふのは我等が生れ乍らの天性に由る。それは宗教教育の結果ではない。周圍の感化でもない。人として生れたる者は何人にも此の心があるのである。如何なる無智妄昧な時代にも在つた。今も尙ある。人類學者が眞に宗教のない民族が有るかを熱心に探索したところ、日の下に無宗教らしいもの僅かに二三を發見した。然かもそれすら宗教の痕跡らしきものがあつた。例外は以て原則の正しい事を證明する。人類は天性宗教的動物として造られた者である。

若し世に無宗教の種族を求めば、之を南洋又はアフリカの野蠻人の間を探すよりも、現代の日本人を見ればいくらでもその標本は得られるであろう。彼等の中自ら無宗教を標榜して居る者が少な

くない。他の事はマルクスに反對しても「宗教は阿片なり」とのマルクスの言を眞理なりとして賛成するのである。宗教は善男善女を支配する方便としては好都合であり、政治上その存在は有利であり、自分の妻子が之を信ずるのは惡くないが、自分はかゝる虚僞迷信を信じやうとは思はないと云ふ者が我國の高官にあり、學者にある。實業家にある。學校教師にある。然し乍ら彼らは果して神を信ずることを欲し無いのであるか、只自己の能力と智慧とを誇り、自己の現在に滿足してゐる者であろうか。否、何處を見ても現代の日本人位心に滿されない大いなる空虚を感じて居るものを私は見ない。彼等は言ひ知れぬ嘆を以て己が全欲求の滿さるべき何者をか求めて止まないのである。

あゝ神よ、鹿の溪水をしたひ喘ぐが如く
わがたましひも汝をしたひ喘ぐなり。
わがたましひは渴ける如くに神を慕ふ。

活ける神をぞ慕ふ。
何れの時にかわれ往きて神のみまへに出でん（詩篇四二篇）とは我等皆等しく心の中に叫んで居る聲ではないか。

かく我等が切に我等の靈魂の奥底より呻めき喘ぎて神を求めるのは、何を得やうとしてゞあろうか。そも我等は如何なる神をか求めつゝある。我等は趣味として、又修養として、はた道樂として片手間に神を求めて居るのであるか。然らず、我等が神を求めるのは人間が人間らしく生くる必要上已み難き欲求から出て來るのである。

げに神のみが此の欲求を滿し給ふ。否、此の欲求を滿し得る者をこそ神と呼びて、我等の靈魂は之を探し求め、慕ひ喘へいでゐるのである。

されば我等は人が人として神に由つて滿されやうと願ふ欲求の何であるかを今少し深く究め、又

かゝる願を聽き、之を滿足せしめ給ふ可き神の如何なる神であらねばならないかを追し尋ねて見度い。それは、我等の各自の心のうちにわけ入ることである。

よもすがら佛の道を求むれば
我が心にぞ尋ね入りぬる。

源信僧都

意識、潛在意識、本能

我等の活動は、之を心の方面から見て、凡そ三通りに分つ事が出來る。その第一は意識的活動であつて、我等が或る一事に注目し、その事に專念するものを云ふ。第二は副意識又は潛在意識の活動であつて、例ば、我等が讀書に專心しつゝ、然かも聞ともなく柱時計の時を刻む音を聞き、窓外に鳥の囀る聲を聞き、又思ふともなく時は朝、季は春の長閑さを思ふ如きはそれである。第三は無意識的活動であつて、例ば、小石が飛び來て眼に入らんとする時、思はず知らず眼を閉ぢるが如きはそれである。我等は此の時眼を閉ぢやうと思つて閉ぢたのではない。思ふ暇だにあらず、眼は既に閉ぢられて居るのである。之は動物にもある本能の作用である。

若し意識を富士山に例ふれば、副意識又は潛在意識はその周圍を繞ぐつて關八洲に延ぶる裾野にも例ふべく、無意識は更らに其の根が延びて海中に入り、大平洋と日本海の底に至り、地球全部に亘つて際限もないのに比べられやう。又若し我等の心を天空に例ふれば、我等がそこに輝くプライアデス又はシリウス星を見つめる時、その星が意識の中心となる。然かもその時、我等の眼界にはその附近の諸星も亦入り來る。之が副意識又は潛在意識である。それらは遠く我等の眼界以外に延び、無限の全宇宙にそれが沒し去る。こゝが無意識界である。此の無意識界の神祕は我等の測り得ざる

ところであり、然かも之が我等の活動を左右するのである。若し人は宇宙の謎なりとせば、無意識こそは人の謎であると云ひ得る。

かく我等の心に三つの領域がある。人の活動はその三つの何れからか出るのである。そして我等が神を慕ひ求めるのも亦、單に之を意識して求めるのみでなく、無意識中に之を求めつゝあり、又心は他事に專念しつゝ、尙も其の側に呼く靜かなる細き聲を聞くのである。

我等が人より聞き又書物を讀んで知つた神に關する事柄が、その當座は何の興味もなく之を馬耳東風として聞き流し、忘れ去つて最早や之を意識しないでも、一度聞き又讀んだ事は、永久に我等より又宇宙より消失したのではない。それは我等の心の奥底に潛在したのである。そして何か事ある時、突如としてそれを思ひ出で、之に由つて大事を決定し、又時としては我等の全性格が一變する事がある。米國の大說敎家社會改良家ヘンリーワード●ビーチャーの青年時代にそれがあつた。

彼がアマスト大學在學中、最初は基督敎に何の興味をも感ぜず、宗敎に關する敎科書は頁を切ることすらせず、學年末には新本のまゝ賣り拂ふを常とした。然るに或日鳥銃を肩にして附近の山々を跋涉し、遙かにカネクチカットの流が銀線の如く綠野の間を縫へる美くしき景色に見とれて居た。折しも夕陽滿山を照し、天地の壯美云はん方なし、その時靑年ビーチャーの心に突如としてきらめいた言はヨハネ傳第三章第十六節であつた。

それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり。すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。

ビーチャーは此の時別人になつた。遂に彼は數十萬の民衆に偉大なる感化を與へた、神の愛の大說敎家となつたのである。

かやうに我等が神を明かに意識して神に在つて生くる前に、我等は日常の生活の雜事のうちにも求めるとなく神を求め、嘗て聞き又讀んだ神に關する知識は自分ではとつくの昔に忘れ去つたと思つても、心中に潜在し、性格の一部を形成し、人生の重大事に當り、それが明かに顯はれる。

加之我等は無意識の中に神を求めて居るのである。宛かも空腹となるや自然に食物を欲し、渴するや、自然に湯茶を求めるやうに、靈魂が飢え渴きて、知らず知らず、これを醫す神を求めて居るのである。我等の靈魂が飢ゆる時神を求むるは、赤兒が母の乳房を求めて泣くのと同じである。赤兒は母の乳房のあること、之を吸へば必ず飢が醫さるゝ事を知つて、それを求めるのではない。只飢を感じて泣くのである。然かも何かしらそれが滿されるべしとの豫感がある。その如く我等も已み難き欲求にかられて、求めるともなくそれを滿し給ふ神のある事を豫感して神を求める。

かく我等は無意識に本能よりして、又潜在意識中に、更らに進んでは、明白に意識して神を求める。それは我等の欲求が神に由つて滿されんが爲である。そも我等は神によつて滿されんとする如何なる欲求を有するか。

一、己が生命を完うせんとの願

凡そ人として己が生命を愛しない者はない。我等は常に己が生命を愛し、その傷け毀たる事を避け、滅ぶることを恐れ、之を安全の境に保ち、出來得るだけ之を發達せしめ、之を完全なるものになし度願ふのである。若し人類に此の念なくば、我等は既に遠き昔にその跡を絶ち、此の地に其の裔を遺す事はないであろう。之は生物悉く具有する共通の性質であつて、敢て人のみに限らない。されば啻に我等の日常生活は明に之が意識され、その

目的のためにそれが費されてゐるのみでなく、宛かも草木が日光に向つて成長し、その根が水に向つて延びるやうに、無意識中に我等はその方向に向つて動いて居るのである。

禍より救はれんとの願

されば我等は生活の不安に脅かされるや、常に之を避けんとしつゝある。或は貧に迫る事を怖れる。病み患ふ事を極力避けんとする。人に疎んぜられ、害を受けん事を嫌ひ、又極度に死を忌む。恐らくは現代人の代表的苦惱は其の中病苦であろう。何となれば之は常に前に擧げた其の他の苦しみ、就中現代の大衆的世界苦とも云ふべき貧の苦しみを隨伴するからである。

病の苦しみは只單に肉体上に苦痛を感ずるばかりでない。我等の心が苦しむことにある。人生の眞盛り、爲すべき事の多くして、然かも病の床に臥し、思ふことは少しも爲し得ず、無爲を强制せられ、願ふことは一つも滿されず、世の樂しみ失せゆき、暗き影つき纏ひ、その友は貧、その慰は疎遠、その休息は死、病久しくして所有物は悉く失せ、收入の途は杜絶え、費は多く、如何にして一家を養ふべきかを思ひ煩ふ。かく貧の苦は病の苦を伴ひ來つて、我等を桎梏に引きしめるのである。そして去る者は日々疎く、慰むる友も次第に疎遠となり、人の心の賴りなきを感ぜしめる。此の孤獨の痛切さよ。（此の邊筆者自身の述懷ではない。病者に對する同情である。）。

加之死の恐怖は日々眼前に在る。死して我は何處にゆく。後に殘されし者は如何になる。かく身と心とを蝕む病苦、貧苦、孤獨、憂鬱、恐怖に在つて、我等が己れの生命を完うせんとの願は益々切となる。己が力の如何に弱きかを感ずる時、何者か來つて我を救へよかしと呻き叫ぶに至るものは自然の情である。

イエスがガリラヤに出現し給ひ、病める者を癒し、「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきゝ、死人は甦され、貧しき者は福音を聞かせられ」（マタイ傳一一・四）。數千人が養はれた時、イエスの名聲四方に普く弘がり、群衆はわれも〳〵と彼に附き從ひ、彼を神の子として仰いだ。若しイエスに此の御能力なくば、而して彼等の此の願を滿し給はざりせば、かくまで夥しき群衆が彼に附き從はなかつた事は餘りにも明瞭である。

人はパンのみにては生きない。されどパンなくしては生きられない。我等が生活不安を免れ、人生の樣々の嘆き苦しみを避けやうとする念は、之を斷ち切る事は出來ない。之ありてこそ人類は地上に生命を續け得られるのである。されば一切の肉なる慾を罪惡として之を抑制しやうとすればする程、却つて我等の念を肉に執着せしめ、罪を犯さしめるのである。イエスの救の御業がガルバリ山上、十字架の苦難に由り完うせられる以前に、その準備として彼は先づガリラヤに現はれ、民衆の此の惱を癒し給ふたのは眞に深い意味がある。

イエスに此の御能力があつた。そして今日尙ある。然るに現代の基督敎は之を敎えないで、只肉の慾を斷ち、十字架を負へと勸める。然かも之に反對して、社會的救を高唱する一派は先づ民衆の此の苦惱を癒さんとして社會的運動に由る。彼等は共にイエスに此の御能力のある事を人に敎えず、自らも之を信じやうとしない。

イエスがガリラヤにて一たん此の能力を顯はし給ふた後、彼はかゝる一時限りの癒し以上に、我等の生命を完くし得る途を開かんがため、彼等の此の願を拒み給ふた時、彼等はイエスに失望し、彼を棄て去つたのである。如何に此の欲求が我等人間の心中に根强く存するかは之に由つても知られるであろう。（以下次號）

エレミヤ記の研究（九）

神殿攻撃演說

江原萬里

ヨシア王の死

ヨシヤ王の大改革が斷行せられてより紀元六百八年に至る十三年の間は、沈滯のユダは若返り、枯木に花が咲き出でた觀があつた。中央集權は確立し、文物制度は一新し、綱紀は振肅し、國民に敬神の念は增し、興國の機運は熟したかの如く見えた。外はアッシリヤ大帝國は此の頃既に瓦解に瀕し、ユダを脅威する何國もない。王は春秋に富み、敬虔、誠實、熱心に國事を鞅掌せられ、賢臣朝に在りて之を補佐し、國民は皷腹擊壤して泰平を謳歌すべくあつた。あゝされど賴むに足らぬは此の世の希望である。

明日ありと思ふ心のあだ櫻、
夜半に嵐の吹かぬものかは。

偶々六百八年エジプト王ネコ大軍を率ゐて北上するに相會し、ヨシア王は之をメギドンに要擊して敗れ、はかなき非業の最後を遂げた、此の日よりユダの國運は急轉直下、那落に向つて突進するに至つたのである。

エジプト王の北上は、瀕死のアッシリア帝國がメジヤ及びカルデヤ（バビロン）軍のために瓦解せられつゝある狀況を見て、己も亦其の分割に與りあはよくばアッシリア帝國に代つて、エジプト大帝國の覇權を確立しやうとしたものであつた。ネコ王はユダと事を構へる事を欲せず、殊更にユダの領土を避け、海岸を傳ふてガラリヤに入ろうとした。然るにヨシア王は師を起し、强ゐて戰を挑み、メギドンに迎へ擊ちて却つて敵の矢に當つて戰死した。爰を以てユダの軍は大敗し、王の遺

骸は空しく柩車に載せられて舉國哀悼裡にヱルサレムに還御したのである。（列王記略下二三・三〇）歴代史略は此の事を詳叙して云ふ。

エジプトの王ネコ、ユフラテの邊なるカルケミシを攻擊んとて上り來りけるに、ヨシア之を禦がんとて出往けり。是に於て、ネコ使者をかれに遣して云ふ。「ユダの王よ、是あに汝の與る所ならんや、今日は汝をせめんとには非ず我敵の家を攻めんとするなり。神われに命じて急がしむ。神われと共にあり。汝神に逆ふことを罷めよ。恐くは彼なんぢを滅ぼし給はん」と。然るにヨシア面を轉して去ることを肯はず、却つてこれと戰はんとて服裝を變へ、神の口より出でしネコの言を聽きいれずして、メギトンの谷に到りて戰ひけるが、射手の者ヨシア王に射中てたれば、王その臣僕にむかひて「我を扶け出せ、我大痍を負ふ」と言へり。是に於てその臣僕等かれをその車より扶けおろし其引たる次の車に乘せてヱルサレムにつれゆきけるが、遂に死にたればその先祖の墓に之を葬りぬ。ユダとヱルサレムみなヨシアのために哀しめり（歴代史略下三五・二〇以下）

註　歴代史略は王はエルサレム歸還後崩御したものと誌す。列王紀と齟齬がある。ウエルク教授は王はエジプト王に召喚されてメギドンに往いたが、エジプト王は北征の歸途を安全にするため、之を殺したのであるとの新說を出して居る。

何故ヨシア王が此の無益の師を起して、エジプトの大軍に戰を挑んだか。勿論既に滅亡に瀕しつつあり、此の年滅んだアッシリア帝國の附屬國たる義務を果さんとして、エジプト軍の北上を徂止したものとは考へられない。多分、大改革の結果を過信し、國力は優にエジプト軍を凌ぐに足ると思ひ誤り、且つ今後エジプトがアッシリアに代つてアッシリア全土とその諸民族とを隷屬せしめやうとするの危險を感じ、之を未前に防止し、ユダの獨立を確保するのみではなく、更らに此の機に乘じてサマリヤ、ガリラヤまでも併合し、國をダビデ王の舊に復しやうと企圖したものであろう。然も壯圖空しく、身は屍となつてヱルサレムに歸へつたのである。

國民は王の後に太子ヱホヤキムをさしおき、その弟なる二十三歳のヱホアハズ（ヱホバ堅く保ち給ふの意）を立てゝ王とした。彼は父王の施政方針を踏襲し、反エジプト政策を持して國民に人望が篤かつたからである。然るに新王即位して未だ三ケ月を經ない内に、エジプト王は彼をハマテの地リブラに幽閉し、「ヱルサレムに於て王となりおることを得ざらしめ」、後エジプトにつれゆき、生涯歸ることを得ざらしめた（列王二三）。その運命はその名を以て判斷すべくもなかつた。ヱレミヤは彼の爲に哀歌を作つてその非運に同情した。

逝きませる人のためにな、
泣きそ悼みそ。
遠き地につれゆかれたる
人の爲めにそ、いたく哭け。
彼は歸へり來ませず。故里を
再び見ることはあらじ（第二二章）。

ヱホヤキム王の即位

エジプト王は彼の兄ヱホヤキムを其の後に王たらしめた。王はエジプト親善黨の力によつて位を支持されたのである。今や申命記改革は美事に失敗し、その契約を忠實に履行する時は、國は獨立繁榮すべしとの希望は全然失望に歸した。民はエジプトの重課に苦しむのみならず、無情冷酷なる小人物ヱホヤキムの壓制に泣くものとなつた。王はエジプトの賠償金支辨のため、國民に重稅を課した上に、多くの小弱國の王が大國に模倣して其の宮殿を飾るやうに、彼はエジプト、アッシリアの文物を取り入れて、豪奢なる宮殿を造營し、威儀を誇り、そのために國民の膏血を搾取した。之を見て、ヱレミヤは義憤を發して王を痛罵した。

一三 禍なる哉不義をもて宮殿を建て、

不法をもて高樓を築く者は。
人々に夫役を強ひて何をも與へず
彼はその賃銀を拂はず。
一四 彼は云ふ我がために大厦を建て、
豪華なる宮殿を造り、
窓を明るくし香柏を張り、
朱をもて之を赤く塗らんと。
一五 汝盛んに香柏を用ふる事に由りて、
王たり得るにや。
汝の父は飲み食し、
己を幸にしまさざりしや。
一六 されど公平と公義とを行ひ、
貧者窮者の訴を聽きぬ。
之れ吾を眞に知る道ならずや、
ヱホバの御言。
一七 されど汝の眼と心とは、
むさぼりの外に何もなく、
つみなき者の血を流し、
人をあやめ得るばかりなり。（第二二章）

かゝる王が位に在り、かゝる預言者が野に叫ぶ。兩者の間に迫害と憎惡とは避け得べくもない。ヨシア王に對しては好意を有ち、ヱホアハス王に對しては其の悲運に涙を灑いだヱレミヤは、ヱホヤキム王に對しては冷淡鐵の如く、其の批評は兩刃の劍の如く鋭くして、王をして完膚なからしめた。王のヱレミヤに對する憎惡迫害も亦漸次苛嚴となつた。それは後に說く。

王の次にヱレミヤの敵となつた者は、申命記改革の時に述べたやうに、祭司と預言者とであつた。祭司は申命記改革の結果、一國の宗教が、己れらが儀式を主宰する神殿中心となつて、國政の實權を掌握するに至つた。彼等は民衆に、ヱルサレムの神殿にして嚴に支持せられる限り、國は決して滅びずとの迷信を懷かしめた。

預言者たちも亦エレミヤの迫害者となつた。彼等はイザヤ以來の傳統なる、シオンの神聖不可侵を說き、神の契約、モーセの律法が尊奉せられ、國民の日常の行爲が視則正しくある限り國は滅びる事は絕對にないとの確信を國民に傳へた。エレミヤは大改革の初めこそ、此等の祭司及び預言者たちに好意をもちたれ、彼等がサドカイ主義及びパリサイ主義の迷信に陷つたのを見て、此の兩者と正反對の立場に立つに至つた。此の事は既に述べた。かくして宗敎史に度々其の例を見る如く、此の大改革も亦靈に始まり肉に終つた。只規則づくめの行ひと神殿迷信のみが獨り民衆の心に殘つた外、改革の結果は全く水泡に歸したのである。

神殿崇拜

今や國は獨立を失ひ、アッシリアに代つてエジプトに隷屬せしめられた。惡王上に在りて不義不公平を行ひ、民は重課に苦しんだ。此の時に當り、無智なる民衆の心に倚り賴むものは最早何物もない。只此の神殿の內に奉祀せられた神だけである。彼等は靈と眞理とを以て拜すべき眞の神を知らない。只神殿に集り、そこに奉祀されてある神を祀る事に由つて、神の守護を受け、國は安泰にして民に幸福があると信ずる外、何をも知らなかつたのである。宛かも我國民中無智なる多くの者が、日本は神國にして、伊勢の大神宮ある限りは、而して國民皆之れを國體の淵源として仰ぐ限りは、假令姦淫、賄賂、詐欺、掠奪が橫行しやうとも、我國は安らけく、若し外國が攻め來る時には、嘗て十萬の蒙古の兵船を吹き拂ふて悉く之を海底の藻屑となしたやうに、神は此の國を鎭護し給ふであらうと信ずるのと相似てゐる。

此の神殿中心、シオン、(エルサレム)不可侵の信念は、前に述べたやうに、國民的一般の信念であ

つて、其の源はイザヤの預言に負ふのである。イザヤはエルサレムを以て神の都と信じた。神は神秘的にその神殿に在し給ふことを述べた。然し乍ら、彼は決して神殿に集り、こゝで禮拜を盛んにする事が神と義しき關係に立ち歸り得て、神の恩惠を受けるものとは說かなかつた。否、彼は激烈に之を攻擊した（イザヤ書第一章參照）。只眞實に神に選ばれた「遺りの民」のみが靈的に此處に遺されて、將來神の都の市民となり、眞のイスラエル人となり、地上に神の榮光を擧げるものと思惟したのである。

然るにアッシリア王がエルサレを包圍した時、イザヤの勸告に從ひ、神の守護を信じて頑强にエルサレムを守り、遂に敵を擊退して以來、此の實證によつて民衆の間に、エルサレム不可侵、神殿の神聖、その効驗いやあらたかなりとの信仰が昂まつた。而して同時にその信仰は淺薄となつた。只目に見ゆる此の壯麗なる神殿が、首都エルサレムとユダ國とを永久に守護するものとの迷信となつた。而してヨシア王の申命記改革によつて國中の禮拜を悉く此の神殿に集中して以來、その迷信は益々促進されたのである。

かくて大廟が尊崇せられ、各戸に各警察署に神棚が設けられ、神符が祀られさへすれば、國家安泰と考へ、靈場の附近にどんな魔窟があり、參拜者は參拜のついでに姦淫を行はうが、又政治家はこゝに參拜し、口に忠君愛國を唱へば、どんなに賄賂を取りやり、如何なる不公正を行はうが、神官も政府も敢て心を傷めないのである。

一五　我が愛する者我が宮にて何をなす。
　　その爲すところは惡事なり。
　　聖誓と聖肉とが
　　汝より禍を除き得べきや。

一六　緑ぞ濃き橄欖の果樹、
　汝らはかくぞ呼ばはれぬ。
　猛り吼ゆる喧騒に、
　火は樹に燃え上りて、
　その枝は枯れ失せぬ。（第十一章）

清き流れの五十鈴川のそれに似て、「ゆるやかに流るゝシロアの水」（イザヤ書八・六）は、ユダの國體の淵源であり、思想問題解決の鍵であつた。かもその神殿は國難を守護せずして、稀代の英ヨシアは空しくメギドンに戰死した。ヱレミヤ此の歌は之を述べたものと思はれる。神と民との關係は神殿を崇める事で義しくはならない。聖き民ありて初めて聖き神殿があるのである。若し壯麗なる家屋に豚を住はしめば、之を豚小屋に爲すであろう。「我が家はもろもろの國人の祈の家と稱へらるべしと錄されたるにあらずや。然るに汝らは之を強盜の家となせり」（マコ傳一一・一七）と主イエスは宣ふ。

大演說

爰に於て、神は預言者ヱレミヤをして、此の神殿崇拜の迷信打破を命じ給ふた。此の事たる、一國の實權を掌握する祭司と最有識者たる預言者たちとを敵とし、又無智なる全國民と戰ふことである。その大膽はルーテルが法王の破門狀を燒き棄て、又ウォルムスの會議に單身出席して法王の代理者、皇帝及び全歐州の諸侯の前に、自說撤回を拒否したのに似て居る。是には非常なる勇氣が要る。而し絕對に神に信賴する信仰のみが此の勇氣を供する。嘗てはわれ語ることを知らず、吾は余りに年若し」と云つて逡巡したヱレミヤは、今や神の命を聞いて奮然として確信を以て起ち上つたのである。まことに、

汝腰に帶して起ち上り、
わが汝に命ずる事を語れ。
彼等の面の前に挫ける勿れ、
若し挫けなば吾汝を挫かん。
知れ、われ今日汝を立てゝ、
堅き城、銅の壁となし、
王たち、ユダの牧伯たち、
祭司と國中の民に向はしむ。
彼等汝と爭ふとも勝を得じ、
汝と偕に在りて吾救へば。

エホバの御言（一・一七以下）

である。彼は國家の大祭日に當り、神殿參拜の爲め國中より群がり集まつた民衆を前にして、神殿の廣場に立ち、生命を賭して大演說を爲した。

ヨシアの子、エホヤキムの治世の初め、エホバの御言臨みて云ふ。エホバかく言ひ給ふ。神殿の庭に立ち、神殿を拜せんとてユダの國中より來れる者に、わが汝に命じて言はしむる言を凡て語れ、一言も斟酌する勿れ（二六・一―二）

是れ彼の一生一代の晴れの舞臺への登場であつた。彼が此の時爲した演說の要旨は、載せて第七章に在る。先づ之から記さう。

汝ら「是はエホバの神殿なり」、「エホバの神殿なり」、「エホバの神殿なり」と云ふ僞の言を賴む勿れ。何ぞ、盜み殺し、姦淫し、虛言を吐くか。バアルを祭るか。かく爲して置いて、此處に來り、神殿に於て我前に立ち、我等は救はれたりと云ふ。是れ皆、此等の憎むべき事を行はんが爲めにかくは云ふなり。汝らはわが家を盜賊の家と思ひ違へたるにはあらざるか。眞に吾も亦かく之を見るなりと、エホバ言ひ給ふ。汝ら、其の始め我が名を置きしシロ（アッシリアのため廢墟となりし北方イスラエル國の神殿所在地）に在る我が聖所にゆき、我が民イスラエルの惡の爲めに、如何なる事を我がなせしかを見よ。今、汝らも亦悉く此等の惡を行ふ上は、吾シロになせし如く此の神殿にも亦なさん。吾は汝らの兄弟なるエフライムの全後裔を棄て去りし如く、汝

らをも棄て去らん。

之れイスラエルの民あつて以來最初の神殿廢墟の預言である。嘗て神の契約の櫃はサマリヤのシロに置かれ、國民はこゝで神を拜した。然るに北方イスラエルの國はその罪の故にアッシリアのために滅ぼされ、民は移され、神殿は今や廢墟となつた。その如くユダも亦滅び、その如くエルサレムの神殿も廢墟となるであろうとの預言である。大膽と云へば此程大膽な演說はない。若し何人か確信を以て、これと同樣の言を我が伊勢の大廟の大祭日に、神苑に立ちて、全國から集り來る我が國民の前に述べたと假定せば如何。この言がどの位重大な言であるかは幾分想像せられるであろう。大冒瀆、大不敬、國賊、非國民の叫は各所に起り、その生命は危ぶない。

然るにイエスも亦神殿に於て「なんぢ此等の大なる建物を見るか、一つの石もくづされずしては石の上に殘らじ」（マタイ一三・二）と云ひ給ふて、數日後祭司に捕はれ、その死刑に問はるゝ時、僞證者から『この人は「我は神の宮を毀ち三日にて建つべし」と云へり』と訴へられ給ふたのである。パウロも亦過越の節にエルサレムに上つた時、『アシアより來れるユダヤ人ら、宮の內にパウロの居るを見て群衆を騷がし、かれに手をかけ、叫びて言ふ、「イスラエルの人々助けよ、この人は至る處にて民と律法と此の處（神殿）とに悖れることを人々に敎ふる者なり、然のみならずギリシヤ人を宮に牽き入れて此の聖なる處をも汚したり」と訴へられ、遂に囹圄の身となつてローマに送られた。

イスラエルの民の前に神殿の破壞、國の滅亡を語ることは生命を失ふことであつた。然も神はエレミヤに「一言も遠慮する勿れ」と命じ給ふて、言ひ遁れ得る道をつくることを禁じ給ふた。而し

てエレミヤは全く之に服從したのであつた。此の結果如何。此の事件を記した第二十六章は舊約文學中稀有の偉觀である。

祭司と預言者及び全國の民、エレミヤが神殿に於ける此の言を聞けり。

彼がエホバ全國民に語ることを命じ給ひし凡ての言を語り終りし時、祭司と預言者彼を捕えて云ひけるは、「汝當に死すべし、そは汝エホバの御名もて預言して、此の宮はシロの如く、此の市は住むものなき曠野にならんと云へばなり」と。民皆神殿に於てエレミヤを取りかこむ。

イエスを捕へて之を十字架にかけ奉つた主動者も神殿の擁護者であつた。即ち祭司であつた。而して祭政一致の國に在つては祭司は其國の實權を掌握せる者である。今や、エレミヤは神殿冒瀆、最大不敬漢として彼等の捕ふるところとなつたのである。死に當るものとせられたのである。而してイエスの死にパリサイ人が加擔したやうに、律法の擁護者たる「預言者たち」が此時も同じく、祭司に加擔し、眞の預言者を迫害したのである。

一國の實權を握る者、宗教家、學者全體が眞の預言者に反對した時、一般民衆は最早頼むにたらない。彼は皆その煽動にのせられ、左に右に動搖するものである。只此の時に當り、獨り中正溫健の意見を持したものがあつた。それは裁判官と民の內の長老即ち世俗的實務家とであつた。彼らには崇高なる宗教心は無いかも知れない。然し乍ら常識があつた。英雄的高潔な心はなかつたであろうが、恒心があつた。それ故輕卒では無かつた。此らの者がこの時孤立無援のエレミヤの側に立つた。

かくて此の大不敬事件に關する未曾有の法廷は開かれた。祭司及び預言者は檢事となつてエレミヤを糾彈した。

ユダの牧伯たちこの事をきいて王宮を出で、神殿にのぼり、神殿の新門の入口に座せり。こゝに祭司と預言者、牧伯たちと全國民とに言ひけるは、「此の者に死の宣告を與へよ。彼は汝らがその耳をもて聞ける如く、此の市に惡しき預言をなせり」と。

之に對するエレミヤの抗辨は堂々たるものであつた。イエスの場合と同樣、審かれる者が眞の審判者であつた。我等は次の記事を讀んで眞の預言者の風貌に接し得る。

エレミヤは牧伯と全國民とに云ふ。汝らが聞ける此の神殿と此の市とに對する凡ての言は、是れエホバが吾を遣して預言せしめ給ひしものなり。故に汝らの道と行爲とを改め、エホバの御聲に服へ。然らばエホバが汝らに對して語り給へる禍を改め給はん。されど我については、我は汝らの手中に在り。汝らの見て善とし、正しと思ふ通りに行へ。但し確かに知れ、若し汝ら吾を殺さば、汝らは無辜の血を、汝らと此の市とその市民とに歸せしめるものなることを。そはエホバ眞實に吾を遣はして、此等の言を、彼らの耳に告げ給ひしものなればなり。

見よ此の堂々たる預言者の風姿を。その生命は全く敵人の手中に在りながら、ユダの全國民、權力者、有識者の前に立つて、簡明直裁、直ちに彼らの良心に肉迫し、少しも妥協するところなく、有りの儘に神の命じ給へる言を述べたのである。「我が語るところは我が意見ではない。エホバが吾を遣して預言せしめ給ふたのである。だから汝らはエホバの御聲に服へ。此の吾は汝らの手中に在る。汝らが見て以て善しとする通りになせ」と。

生れつき婦人の如き弱々しき感情を有し、人前に出る事すら臆する性質のエレミヤが、又常に深く神と交はり乍ら、神の御意につき度々疑惑を懷き、全く之を納得するまでは、絶えず心中に神に向つてそれを質して止まない彼が、一度確信を以て起つや、威風凛然、猛虎の嵎を負ふて四方を睥

睨する如く、獅子王の吼ゆるが如く、眼中敵人はなかつた。神の立て給ふ「鐵城銅壁」であつた。

牧伯先づ彼の誠意に動かされ、長老は冷靜に考へた。そして民も亦感動した。此の預言者を若し殺さば、神の御怒は立ちどころに彼らに降らん事を恐れた。

こゝに於て牧伯と凡ての民、祭司と預言者とに言ひけるは、「此の者に死の宣告あらざれ。そは彼は我らの神エホバの御名によりて我らに語ればなり」。

時に此の國の長老立ちて、凡ての民の集りに云ひけるは、「ユダの王ヒゼキヤの治世に、モラシテ人ミカ、ユダの凡ての民に語りて云ひけるは「かくエホバ言ひ給ふ。

シオンは田畑の如く堀返され、
エルサレムは廢墟となり、
宮山はいばら茂れる山とならん。

(然るに) ヒゼキヤと凡てのユダの人々とは、彼を殺さんとしたる事ありしや、彼らはエホバを畏れ、エホバの御顏をなだめざりしや。而してエホバは彼らに降さんと云ひ給へる禍を改め給へり。然るに我らは我らの生命にか、わる大事を誤らんとするなり」。

遂にエレミヤは釋放せられた、此の不敬冒瀆事件が如何に重大なる事件であり、エレミヤの生命は風前の燈の如くであつたかは、エレミヤ記の編者が次の記事を之に附加した事を以ても察知し得られる。

又前に一人の人あり、エホバの御名に由りて、預言する任を受けたり。キリヤテヤリムのシマヤの子、ウリヤと云ふ。彼はエレミヤの凡ての言と同じく、此の國に對して禍を豫め言へり (預言の原言異る)

エホヤキム王と凡ての牧伯その言を聞き、彼を殺さんとす。ウリヤ之を聞き、怖れてエジプトに走りしが、王人々をエジプトに遣せり。彼らそこよりウリヤを引き出し、王の許に携へ來りしが、王劍をもて彼を殺し、彼の屍を賤民の墓に棄てさせたり。

此の先例ありしに係はらず、エレミヤが敢て此の大演說を爲したのは、それが自己の良心、理智に應じ、全く神の命已むに已まれなかつたからであつた。

彼は遂に釋放された。されどその身邊は甚だ危險であつた。然かも神は之を守り給ふ。丁度ウオルムスの會議を出たルーテルを保護して、暫く之をワルツブルグ城にかくまつたサクセン侯のやうに、彼の親友「シャバンの子アヒカム、エレミヤをたすけ、これを民の手にわたして殺さざらしむ」（二六・二四）。

シャバンは嘗てヨシア王の時、祭司の長ヒルキヤが神殿に於て發見した申命記を携えて王の面前に出でて之を讀み、大改革の端緒を開いたものである。我が國の憲法を起草した伊藤博文公にも比すべき國家の元勳であつた。勿論伊藤公のやうな神を知らない者と異なり、敬虔の念が篤かつた。申命記尊重の預言者たちが悉くエレミヤの敵となつた時、彼一家は子及び孫に至るまでエレミヤの親友、且つ後援者であつた。エレミヤを此の時隱まつたアヒカムは其の一人である。

パンと自殺

人はパンのみにては生きない。生き得られない。官吏となり、會社員となり、其の位置進み、收入增し來る時、人は心にそれを以てして滿し得ない、大なる空虛を感じ初める。財產を蓄へるだけでは人生は全く無意義である事を知り、何か意味のある仕事をして見度く思ふに至る。昔は政治界に出る事がそれであるとした。今や代議士の墮落を見て、寧ろ社會的に活働しやうと思ふ者が多い。

兎に角人は只パンを食ふことのみでは生きて居られないのである。そこに人間を支配する大なる道德律がある。人は之に反抗して見て遂に敗けるのである。一生を金儲けのために費し、巨萬の富を蓄へても、最後はピストル自殺をする。寫眞器王、マッチ王の如し。私は現在深い關心を以て多くのかゝる精神的破產者の將來を見守つて居る。

受難週間の研究（二）

葬りの日のために

小栗襄三

イエスは思出深い彼の三年間に渡る公生涯を殘し、旬日に迫つた死の旅路につかん爲め、エリコを旅立たれた。起伏多き瘠土の路を過越の祭りに都に詣る旅人の群に伍して、十二弟子を伴はれつゝ、神の都エルサレムへと向はれた。半日程の道程も、未だ曾つて經驗せざりし、新しき路となつたであろう。彼はその使命を思ふ時に、御足の運びも輕く、一歩一歩坂路を踏み固められつゝ、乍併ら、弟子等の後事を想ひ、又飽く事を知らざる民衆を想ひ、又死出の旅路を思はるゝ時に、その足取りの鈍るを如何んとも爲し能はなかつた事であろう。想ひは過去に、現在に、未來に、又その成就せねばならぬ使命に。併し唯一事は聖志の成就せられん爲めのみ。

道半ばにして、遙るかオリブ山を望見し得らるゝ頃、彼は「われ山に向ひて目をあぐ、わが扶助はいづこよりきたるや、わがたすけは天地をつくりたまへるエホバよりきたる、エホバはなんぢの足のうごかさるを容したまはず……なんぢを守りてもろもろの禍害をまぬかれしめまたなんぢの靈魂をまもりたまはん」と自然と口吟まれた事であろう。返り見れば、彼方にモアブ連山は聳え、その山麓には、死の鈍重を含む死海は默々として横はるエルサレムへの道を、過越の供物、罪なき羔がその屠場に引かるゝが如くに。

暮色漸く迫る頃、故郷ナザレを想はしめる、オリブ山腹の小村落ベタニヤに着かれ、旅路の疲れと、想ひの疲れを御弟子の家に憩はれた。主のベタニヤに宿られしを聽き傳へられし時、マリヤ、

マルタ、ラザロはシモンの家に集り來り、主を喜び迎へん爲めに、夕餉の食を用意して、十二使徒を混えて饗宴は開かれた。マルタは疎漏なきように、又心からイエスを寛がせん爲めに、一切を切廻し、細心の注意を拂つて仕へ、幾分なりとも主を喜ばせんと立働いた。誠に美はしき心使ひであつた。イエスも亦喜ばれし事であつたろう。斯して食事の終りし頃、マリヤは家に藏し置きし印度産の高價なスピケナルドの香油—アラバスタの壺を持ち來り、固く封印せられしその口を打ち碎きてイエスに振り注ぎ、頭髪にて御足を拭ひ潔めた。馥郁とした香油の馨りは、室内に滿ち溢れ、イエスの衣服のみならず、會席者の衣に迄も馨りは染み渡つたであろう。これは彼女のイエスになし得る最善の奉仕であつた。彼女の一心はイエスを喜ばせん爲めのみであつて、何の要求むる處あるなく、數日をいでずして十字架に付かるゝイエスの門出を祝す唯一の溫き心馳となるをも知らず、唯誠心よりイエスを迎へん爲めの行爲に外ならなかつた。

乍併ら、イエスにとつては、彼女のこの心馳せは誠に美はしく、又溫きものとなつた。來る可き十字架の處刑を前にして、寢食を共にせし弟子等すら彼の意を悟らず、剩へ彼を金錢に換へんとする弟子の共に居る所、又イエスを知らずと言張る弟子、彼れ捕らるゝや、一散に逃失せる心許なき弟子等、只管離反の道を辿る彼等に引換へて、彼女の衷心よりの接待は、今や過越に屠らるゝ羔を清め、葬りの日の爲めに、これを準備する行爲となつたのであつた。使はれし三百デナリの香油は、我等が救主イエスを葬る備へに高價であつたろうか、安價な香油を以て型ばかりの事をなして、彼の葬りの準備をなす可きであつたろう乎。正饗宴の終りを飾る香油、賓客を懇ろに待遇するにな

くてはならぬ香油、(現在もアラビヤ人間の食事に此の習慣あり)しかもこれが葬りの日の爲めの香油になるならば、此世の何物を差措いても準備す可き香油であつた。

然るに、來る可き悲慘の事實を、誰よりもよく知る御弟子の一人、イスカリオテのユダは言ふ。

なに故かく濫りに油を費すか、この油を三百デナリ餘りに賣りて、貧しも者に施すことを得たりしものを。

と、これは如何なる意味であろうか、慈善を標榜する彼は、主を賣りし價、銀三十を貧者に分け與へたであろうか。彼は己が爲めに土地を買ひし慈善家ではなかつたろうか。誠に頼もしき慈善家はユダである。

これに引換へて幸ひな女にしてマリヤの如き者が何處に居るであろうか、福音の宣傳へらるゝ處には、彼女の爲せし事は記念せらる可き行爲であつた。彼女は、彼女の唯一の寶を、眞心を以て、彼の葬りの日の爲めに使ひ果した。此の數日間に起る總てを知り給ふイエスは、如何なる贈物にも優して彼女の香油を心より喜び受けられた。誠に葬りの日の爲めに相應しき物であり行爲である。

馨り高きスピケナルドは、彼が地上に足跡を印せしその最後の日迄、馥郁として彼が身體を覆ひ包み、凄慘なる旬日の日々に、一抹の情緒を薫らした事であろう。

又葬りの日の爲めには、誰を差措いても準備せねばならぬは弟子等の義務でなければならなかつた。三年間夜も晝も御手に掛て育てられし彼等は主の最後を衷心より送らねばならい時に、彼等は反つて離反の道を辿つた。孤獨なるイエスは、名もなきマリヤに葬りの日の準備をされつゝベタニヤの僻邑に、安息日の一夕を送られつ、死出の旅路を祝はれたのであつた。

基督教と結核病

平山去私

結核病に關しては、聖書には新舊約を通じて唯二箇所に記されるのみで、即ち利未記二十六章十六節及び申命記二十八章二十二節に於ける癆瘵といふ文字は結核病を意味するとの事である。

此の二つの記事に依れば、人類が結核病に惱まされるのは、人類が「神ヱホバの言に聽き從はず、我が今日汝に命ずる一切の誡命と法度とを守り行は」ない結果であると言ふ。一言を以て表はせば「癆瘵と熱病」とは天刑又天罰であるといふのである。

此の記事に對して私は近年になつて漸くそれが眞理なる事に氣付いたのである。勿論結核病に罹る人が惡人で、罹らぬ人が善人なりとの意味ではない。善きも惡しきも人類は全體として、結核其他の傳染病に對して連帶の責任を免れぬのである。何故ならば斯種の病氣を撲滅することは、醫學問題といふよりも寧ろ（或場合には其の殆んど全部が）道德問題であるからである。

此の事實を極めて明瞭なる實例を以て說明せんが爲には、先づ癩病に就いて述ぶべきであろう。

癩病は凡ゆる疾病の中で最も悲慘なるもので、病者自身の薄運は素より、一人此の病人を出せばその子孫の末の末、親類の端の端まで詰婚の自由を失ふ事が稀でない、而も癩病は傳染病であつて、遺傳するものと思ふのは全く迷信に過ぎないから（吾人は極力此の悲しむべき迷信を打破せねばならない）病者を一定の隔離せる場所に集めて生活せしめさへするならば、此の疾病に基く凡ゆる慘禍は、最も簡單に且最も確實に除去する事が出來る。即ち之に依つて病者は世人の迫害を免れて平

和に暮すことを得ると共に、病毒の蔓延が阻止せられる結果、此の病氣は根絶せらるゝに至る。歐米諸國は何れも此の一手段に依つて、此の病氣の撲滅に成功したのであつて、決して癩病に對する特効藥が發見せられて居る譯でもなく、又之を全快せしむる良き療法が存在するのでもない。

それ故に癩病撲滅は醫學的に解決せらるゝのでなくて、却つて費用を投じて患者の爲に病舍を設置するといふ樣な經濟問題として解決せられるのである。之を更に深く觀察するならば、先づ第一に一般國民が病者に對して同情心を持たねばならぬ。愛がなければならぬ。更に又自己及び子孫の運命に就いて、眞摯なる考慮を拂はねばならぬ。そして酒、煙草、其他種々なる享樂に使ふ費用や軍事費の巨額なる財貨を、此の病氣を撲滅する爲に轉用すべく決意せねばならない、斯くて結局これは道德問題として解決せられる。

又黴毒に對しては既に獨逸のエールリッヒ博士が稀世の天才と努力とを傾到して、サルバルサンといふ藥を發明した。古今東西數限り無き藥の中に、此のサルバルサン程確實なる藥効を有するもの果して幾何あるや、實に五指を屈するに足らぬ程であらう。然るに此の藥の卓効にも拘らず、黴毒は依然として存在を續けて居る。此の事實は醫藥などが如何に進歩しても、之のみに依つて傳染病を根絶し得ない事の有力なる證據となり、而して何が最も大切であるかを暗示して居る。

さて結核病に就いては、諸外國は未だ之が撲滅を完成しては居ないが、非常なる努力の結果、何れも之を激減することが出來たのである。我が國としても、此例に倣つて、此事業に對し上下擧つて盡力する事が、焦眉の急務である。しかし其方法は理論上は兎も角、實際問題としては甚だ複雜であつて、少からぬ財源を要し、今後の研究に待つ

べき點も少くない。

しかし一事は既に甚だ明白である。即ち結核病の場合には基督教的信仰の普及が、病氣の豫防上にも、或ひは又其の治療上にも、最も有力で且根本的な要素であるといふ事である。これは統計的にも立證し得る事で、自明の理である樣であるが、從來一般の人々に知られて居ないから、私共は特に之を高調する必要があると思ふ。

東京市療養所長田澤博士の最近の著書サナトリウム中に療養所開始以來十年間に於ける宗教信者の病狀に就いての統計が載せられて居るが。これは私共として特別なる注意を拂ふべき價値がある。此統計は基督者に非ざる醫局員の公平なる調査の結果であるが、之に依ると基督信者は無宗教者に比較して、治癒輕快率に於いては殆んど二倍に相當する好成績を收め、又死亡率に於いては殆んど半分に近き少率を示して居る。

其原因は基督教的信仰を通じて、我々の精神に與へられる偉大なる神の恩惠と能力、それから精神の肉體に對する密接なる關係に依つて、充分に說明し得る所である。勿論これ程確然たる効果を奏する藥劑などは絕對に存在せぬのである。次に其統計表を揭げて御參考に供したい。

	佛教			神教		
	男	女	計	男	女	計
治癒輕快率	19.2	13.9	17.5	36.4	15.7	29.2
死亡率	59.6	70.6	63.5	57.9	69.5	58.8

	基督教			無宗教		
	男	女	計	男	女	計
治癒輕快率	34.9	23.4	30.6	14.8	11.7	17.4
死亡率	44.2	45.9	44.9	73.4	82.6	76.1

次に國家的に觀察するに矢張同樣なる現象を認める。

世界に於いて結核病死亡率の最も少き國はデンマークであつて、此處では人口一萬に對して結核

病死亡數は僅か八・一に過ぎない。我が國に於いてはこれが一九・二六であるから正に二倍以上に相當する。

而してデンマークは、かの有名なる晨聖グルンドウヒの創始せる多數の國民高等學校の教員に依り、基督教の感化の最もよく普及せる國であることは、私共の夙に學び知る所である。

然らばデンマークの結核死亡率の少きは基督教信仰の結果であるか。公平なる自然科學者は之を如何に見るか。之に就いて醫學博士理學博士宮島幹之助先生は、昨年十月前橋市に於ける日本中央結核豫防會總會席上にて、デンマークに於いて結核撲滅事業の優秀なるは全くその根源をグルンドウヒの精神教育即ち基督教の感化に歸すべき事を醇々として說かれたのである。尤もデンマークは結核患者を收容すべき病床數の多い點でも亦、正に世界第一であるが、これは死亡者數の少い事に對して有力なる一原因となるとは雖も、その眞の原因は矢張其奥に漲る所の基督教的精神である。此の精神があつて始めて多數の病床も出來、其他種々なる點に於いて必要なる事項が實現されるからである。以上の叙述は不完全なるも、基督教と結核病との關係は大略御賢察願へることゝ思ふ。我が同胞が本末を誤る事なきよう切に祈る次第である。

どの位結核病が我が國民を惱まして居るか、それは想像以上である。何とかして之を此の地表からなくし度いものである。それには信仰と學問とが要る。此點につき私は平山醫學士の將來の大成に多大の囑望をもつものである。

基督教的信仰が肉體の病患に對して偉大なる活力を與へることは私自身之を經驗して居る。私の片肺は萎縮して用をなさない。私の聲帶は一時駄目となつた。然るに私は働いて居る。今では月一回講義をし、來客あれば盛に論じて居る。醫師の診斷に由れば、私はとくの昔に死んで居る。然し醫者に見放されて、私は醫者を見放した。今日では信仰のみで生きて居る（江原）。

柏木通信（第十七信）

齋藤宗次郎

全集雜錄　神の優握なる恩寵によつて、內村鑑三全集は既に配本の運ひに至つた。然し其道程は決して圓滑平靜ではなかつた。恩惠が深いだけ夫に比例する苦難があつた。如何にして義を貫かんかに就て、充分なる產みの惱みがあつた。責任を負ふ者の眠られぬ夜の續きしをも聞いた。全集の企畫を起し給ふと共に、北はオホーツク海濱より、南臺灣ジャヴァ島に亘り、東、大海を越えてボヽカテペトル山麓、サクラメント河畔の同志に祈を命じて、其編輯發刊を助けしめ給ひしを知つた。時の迫るに及んで、「東朝」が一たび聲を擧げて、視よ、彼の姿に裏む不朽の眞理を、これぞ日本が世界に向つて貢獻するの典籍なりと告げし外野にも巷にも呼ぶ聲なく、又飜る旗もなかつた。現代の此國否現代の此世界に於て、眞の愛と義の產物が生るゝ時に無難安易でありやう筈はない。而して之を衷心より信じて愛して迎ふる者も亦、少數の牧羊者と異邦の學者達のみであらう。生命の力を只一つのたよりに、荒寥冷酷の世に、獨立の第一步を踐み出せし全集を懷いて、二千年の昔も今も變らぬ神の聖圖を心の限り頌へた。斯くて我心の願は二樣の矛盾に動いた。豚の前に眞珠を投げ與ふるは宜しからずと、又云ふ、之を萬國の人々に與へて滅びの子　天の父を憶はしめよと、我退いて只聖旨の成らんことを主の御名に於て祈つた、聖靈之に應じ給ふと信じつゝ。　○最初の一卷を手にして　日夜編輯に當る者と雖も、製本成り函に納つて目前に現はれし時には、まるで別個のものを迎ふるの感じである。一日千秋の思を以て其發刊を期待せる人々が、愈々其掌中に握りし時の態度と感じとは萬人萬樣であらう。然し其一致する所は、感謝の一點に外ならぬと信ずる。我が編輯室に於ては、三月廿六日夕方、最初の一卷を前にし、過去二年間の積る恩惠を顧みて、共に盡きざる感謝の祈を捧げた。其後寄せ來る敎友の書信によれば、或る友は病床より跳び起きてハレルヤを歌ひ、或る人は外務省の官舍の一隅に跪き、或は雞舍の側に、或は大學の敎授室に、或は味噌醸造庫の小暗き土間に、或は六甲山麓、北上河畔、日本アルプス山下、千葉の農村、北海、靜岡、大阪若松、岡山等天々此大業に對して信仰を表白せる美はしき實狀を報じ來る。此感謝此滿足は蓋し何時までも各自の記憶に殘るものであらう。　○宮部老博士來訪　植物學會創

設五十年記念會の招聘に應じて、札幌より上京せられし恩師無二の親友たる同博士は、四月五日午後全集の編輯室を訪ねられた。折しも執務中の予は、誰とも知らず振り返り見て、不圖博士の温顔に接し歡喜抑へ難きものがあつた。狹き室の左右を顧みつゝ、靜かに一歩々々を運ばれし博士は故人の書齋に入つて暫し感慨無量の態であつた。予は全集に關する一切の資料を示して簡單なる説明を加へた。博士は一々首肯しつゝ、一を聞いて十を解するもの、如く、其喜悅と滿足とは折々眼鏡越しに送らるゝ瞳光の閃きに現はれた。「宜しく願ひます、風を引かぬ樣になさい」との温かき言を殘して室を出られた。そして直ちに祐之、大賀の兩博士の案内によつて多磨の恩師墓地に赴かれた。

恩師二周年記念日　恩師去つて既に二周年、昨日の樣にも思ひ、十年前の樣にも思ふ。時を經るに從ひ、肉なるものの形なるものが消えて、其畢生の業なる十字架の福音のみが、次第に頭角を現はして暗世を照す樣になつて來る。過去一ヶ年間に於ても、恩師が死して益々强く靈的に活動せらるゝ、數々の奇しきものを我等は見た。去れば三月廿八日午後三時教友三十餘名多摩の墓前に集りし時にも、其夜六時柏木講堂に百數十名集りし時にも、各自先生の生涯に横溢する神の力を感じて、其遺業に對する大なる希望を抱くに至つた。司會者南原氏の最初の指名を受けし鈴木俊郎氏は全集に就て最も適切なる意見を披瀝した。即ち編輯は勿論、印刷も校正も製本も廣告も販賣も宣傳も乃至は之が誦讀も、一に義の精神を失つてはならぬと說いた。續いて山桝持地淺野大賀塚本畔上諸氏の感話も皆夫々傾聽に値するものであつた。全集の感謝會をも兼ねし此記念の集會は、藤本氏の開會の祈、金澤氏の最後の感謝を以て又も恩寵のうちに閉された。

日曜日の集會　思ひ見れば我等は皆思はぬ時に捕へられて十字架の御許に集められた者である。背叛の性によつて幾度か遁け去らんとせしも遂に許されなかつた。一たび罪の赦しの恩惠に預るや神の絶對愛を信じ自由を主に於てのみ保ち得る事を知つた。眞に生涯の大轉換である。日曜日來れば主は我等を招き給ふ。聽て求むる心は飽かしめられて歸る。光よ、生命よ、確證は我手に在り、我靈にあり。

一、眞正の知慧　鈴木
一、約翰傳一章後半の精神　藤本
一、復活に就ての所感　寶田
一、アブラハムの信仰　山桝

人道主義とマルクス主義

私の友人知人で從來基督教に好意を有つて居た者が近頃續々マルクス主義に投ずるのを見る。彼等は人道主義者であつた。而して此の事は人道主義の破綻を語る者である。

人道主義とは愛憐主義である。弱きを憐み、之を扶けやうとする主義である。此の主義を奉持する者は殆ど皆純眞、純潔純情の人である。彼等は世の我利我利亨者と異なつて、高尚なる理想を有し、物質的生活よりも精神的生活を重んずる。人道主義は理想主義である。

人は利己的にのみ生き得ない。他を愛し、他に愛せられて、人生に喜悅あり、弱き者惱める者を扶けて、人生に意義がある。それ故人道主義は尊い主義である。現今基督教會を見ると、その殆ど全部が此の人道主義の上に立つて居るやうに見える。教會に弊害が多いが、凡てが惡いのではない。そこに成る種の愛がある。それは人道主義から出る愛であつて、それに溺つて多少の安慰と喜悅とがある。

然し乍ら、現今教會の振はない理由も亦そこに在る。由來人道主義は人間的愛の實行である。その本質は自然の人情である。されば如何にそれが純化されても人間的缺陷が伴ふ。此の主義を我等の唯一の生活原理とし、徹底的にそれに生きて見よ。全く己を抛げ出して弱者のために献げて見よ。我等はそれをなすには餘りに我等の愛の少なきを感ずる。我等若し純眞の愛を標榜すればする程、我等の良心は我等を虛僞とする。我等は此の律法の桎梏に悶える。

爰に於てか、彼等が主義に眞面目であればあるだけ、道德が詛はしくなる。その束縛より全く解放され度く思ふ。而して彼等が本來の目的たる弱者扶助は、彼等の愛情に由るよりも、寧ろマルクス主義が唱へるやうな、社會的必然的革命に由る方が、よりよく有效に、大仕掛に、徹底的に達成せられるやうに思ふに至る。近頃人道主義者がマルクス主義に走る最も有力な理由は之であると私は思ふ。

彼等は愛せよとの律法の束縛に得堪えずして、それ以上に我等の靈魂の自由を束縛する唯物論に陷つた。やがて辱細なる感情を有する此等の人道主義者はそこに何等の慰安なく、どの位靈魂を苦しめるかを悟るであろう。

人道主義者の往き場所は純信仰以外にない。信仰は超道德である。神の無限の愛を信じて生きるのである。その愛が我等に人道主義の思ひもよらぬ自由なる愛を供する。彼等の達成し得ない事業をなす。信じて見よ、わかる。

身邊漫筆

○新學年が始まり、私の末子が小學校に入學した。子は大喜び、入學前次郎さん（田村君）から御祝とし頂いたカバンを肩にかけ、横尾さんから頂いた机と椅子によつて、もう學校に入つたつもりで勉强して居た。次郎さんが寫眞を寫してやらうと云はれると、くるつと背を向けてカバンを寫さす仕末。今後十數年の學校生活に一體どんな者になるか親は心配でもあり、興味もある。幸多かれと祈るのは親心である。

○先日何を讀んで居るか覗いて見ると婦人雜誌の連續小說ピノキヨとか云ふものを面白そうに讀んで居た。わかるかと聞くと難かしいがわかると云ふ。私が始めて小學校に入つた時には假名さゑ知らなかつたのに比へて現代の知識の普及に驚いた。然し今では子供の雜誌が澤山出版され、それを讀み耽けつて却つて頭腦が散漫になるやうに思はれる。寧ろ教科書だけをみつしり精讀した方がよいと私は思ふ。だが教科書は餘りに單調である。

○それ故私は末子入學を機會として家庭聖書輪讀會を創めた。女中とも一家六人の聖書研究會である。まだ僅かしかならないが中々面白い。此の研究會には奇拔な意見が出る。末子は云ふ、僕はマタイ傳第一章が一番面白いよと。大人が一番乾燥無味とする箇所が一番讀み易くて面白いのだ。そうすると今年三學年になつた次女が、アブラハムイサクを生むておかしいね。男が子を生むことなんかありはしない。あゝでもお父樣はなければならないね、と自分の研究の結果を發表する。

○神樣は何處にいらつしやると聞くと、無雜作に天にいらつしやると答へる。天とは大空の彼方と思つて居る。そこで私が、「望（末子の名）、お名は何處に居る」と聞く。「こゝに居るよ」「どこに、此の手の中にかい」「いや」「では足の中にか」「いや」「では腹にかい」「いや」「手の中でも足の中でも腹の中でもなく、望は居るだろう」「うん居る」「その通り神樣は此の机の中でもなく、本の中でもなく、又上の天でなくいらつしやるよ」「ふうん！」。「でもね、望は手ではないが、手をつめると痛いだろう」「そりやいたいさ」「だから手の中にも望は居るね」「うん」「そのやうに神樣は天にも地に私達皆んなの身體の中、心の中にもいらつしやるのよ、神樣は天でも地でも又私達でもないけれど、どこでも神樣にはすぐ知れるのよ」。こゝまで來ると小供はわかつたやうな、わからないやうな顏をする。然し、何か興味を感ずる。

○現今の教育は只器用な小悧巧な、直ぐ間に合ふ、スパシコク立ち廻る人間を作るのが目的であるらしい。雜誌を見ても、娯樂になり且つタメになるものが一番よく賣れる。基督教の雜誌でも次第にそうなりつゝある。氣品は段々失はれて來た。

○然し乍ら、何時の時代でも、最も必要とせられる人物は小器用な人物ではない。眞面目な正直な人間である。頭は鈍重でもよい。目先はきかなくてもよい。學問は出來ずとも腹が据り、虛言をいはず、全然信賴出來る人物が一番大切であり、常に求められて居るのである。今はこんな人物は甚だ稀である。それだけ求められて居るのである。人間は眞正直でありさゑすれば、唯それだけで決して食ふには困らない。眞の基督者は他に何の能はなくとも、唯それだけで、一生中には相當の收入あり、相當の社會的地位を得る。失敗する者は多くは小悧巧な人物である。そして現代教育はこれを作るのが目的らしい。

矢内原忠雄著（一粒社版）

マルクス主義と基督教

布装函入　定價　二百五十三頁　一圓十錢

マルクス主義の哲學は歐洲十九世紀前半に流行した唯物論であつて、現今哲學論としてはマルクス主義者以外に大した價値を認める者はない。その宗教論は淺薄その物と云つて少しも過言ではない。然し無價値ではない。世間にはマルクス主義以下に淺薄な宗教を信じて居る者が多い。それをぶち毀すには善い道具である。私はそう見て居る。若しマルクス主義が思ひ上り、眞の神を追放しやうとするならば、天に座するもの笑ひ給はんである。彼等は躓く石に躓き、彼等の事業は美事に失敗するであろう。

本書は神とベリアルと何の關係なきことを善く說いてある。恐らく今日の日本で著者を措いて他に兩者を併論し得る資能のある人を求めることは困難であらう。

訂正

先月號身邊漫筆に矢内原氏の「基督者の信仰」を再版された小西友作氏を福岡市で印刷業開始と書きましたが、あれは小倉市江南町の誤でした。

内村鑑三全集

申込金　一圓　毎月　二圓　書留送料　二十一錢

第一回配本として第五卷新約研究上を發行す。立派な出來ばえであります。申込甚だ多く增刷の由、まだ豫約を申込まれない方は今申込まれて遲くはないと思ひます。

（本社にて取次ぐ）。

江原萬里著

聖書的現代經濟觀

定價　一圓二十錢　送料　八錢

寂しき心を引きしめ、信仰の偉大を想はしめ、强く神を慕はしめる等々の感想を寄せらゝる讀者が多い。私は此の出版が無益でなかつた事を喜こんで居る。現代に缺けて居る何者かゞ此の中に在ると確信する。

本誌讀者に謹告

聖書の眞理社より直接御購讀以外の方で本社に轉居の御知らせが度々來ます。多分獨立堂の取扱と思ひ其の方に回送して居ますが、御注意下さい。

聖書の眞理定價（送料共）

一部	二十錢
半年（六部）	一圓十錢
一年（十二部）	二圓十錢
海外一年	二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社（振替東京六三三七五番）へ。獨立堂にてもよし。

昭和六年度合本

二圓五十錢　送料共

總クロス製　殘り少々あり

昭和七年四月廿六日　印刷納本
昭和七年五月一日　發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷兼發行人　江原萬里
東京市外澁谷町向山九七
發行所　聖書の眞理社
東京市神田區表猿樂町一九
印刷所　共榮堂印刷所
東京市外淀橋町柏木九四六
發賣所　獨立堂書房
振替東京一九四六六番

（昭和三年二月十六日第三種郵便物認可）　聖書之眞理　第五十五號　昭和七年五月一日發行（毎月一日一回發行）

本誌定價二十錢